

## 連載14 「僕の人生は僕が決める！」

私たち障がい者支援の領域において、あるいは障がい者当事者運動の領域において「私たちのことを私たち抜きで決めないで(Nothing About us without us)」という言葉、スローガンがあります。「自分の人生は自分で決める」という当たり前のことが保証されていなかった障がい者支援の歴史がこの言葉を生み出しているのですが、このスローガンが初めて掲げられたのが1970年代だということを考えると、それから50年、どのくらい世の中が進化し、このスローガンに従って支援が進められたかについては、いささかの不安が生じます。特に知的障がい、自閉症支援の領域では、「あなた方には判断能力がないのだから」と全てのことが周囲の関係者(家族、教職員、支援職員、行政職員 etc.)の決めた通りに進んでいくが多かったのではないのでしょうか？(今でも？…)

昨秋、「僕の人生は僕が決める！」と学園を飛び出した方がいます。「僕のことを捜さないで」と、彼は、飛び出す日、最後のお別れの言葉を私に伝えに来たので「あなたの言う通り、私はあなたを捜さないよ、でも、あなたがお家に帰る途中に事故にあったか、なにか困っているのではないかは心配なので、必ず、GPSの携帯は身につけていてよ。GPSが移動していれば元気だということがわかるし、長い時間止まってしまえば、事故にあったかもしれないとわかるからね」と答えました。今までも何回も飛び出している彼でしたので、GPSは、彼にとっては必須のアイテムで、最後の最後までこれが役立ったのでした。

世間常識的に考えて、入所施設から勝手に家庭に戻ることは、いけないことだとされています。また、もちろん家族だって、それは悪いこと、支援職員に迷惑をかけることだと考えます。支援職員だって、まだまだ自分たちの支援しなくてはならないことがたくさんあると考えていますから、家に帰るなんてとんでもないことだと考えます。

また、現実的にもはたして数年前に破綻した地域での生活が可能かどうかは、かなりのクェッションマークです。

しかし、彼は彼なりにこれらのことを全て考えて、一人で家に帰ることを選択し、健気にも最後のお別れの言葉を園長である私に伝えに来たのでした。

「捜さないでね」は、彼にとっては「信じてください」でもあるし「お世話になりました」でもあるし「ありがとう」でもあったのでしょう。その後、家庭まで出向いて相談した支援職員に彼は高らかに宣言したのでした。「僕の人生は僕が決める」と。

彼は、入所してからのこの数年の間に、自分の気持ちを上手に伝えることができるようになりました。今まで伝えられなかった甘えたい気持ち、羨ましい気持ち、上手に伝えられるようになっていました。もちろん不平不満も、暴力や威嚇や物損ではなく、言葉で上手に語れるようになりました。小さい時から参加できなかった集団でのレクリエーションや自治会などにも顔を見せることができるようになりました。それもこれもみんな彼の生きてきた人生を振り返っても、<初めて>できるようになったことばかりです。

確かに周囲の関係者(家族や支援職員等)にとっては、まだまだ不十分で未熟に見える彼の言動です。しかし、彼は彼なりに自分の行動変容に手応えを、自信を感じていたのでしょう。それが彼の「自分の人生は自分で決める」宣言につながったと思えるのです。

そうしたら自分たちのすべき支援は、彼の自己決定を応援することしかありません。「困ったことがあったら、いつでも電話をしてきなよ」と本人に、また失敗を、生活破綻を懸念する家族には「困ったときには、いつでも明星学園が使えますからね」と。

知的障がい者本人を中心において物事を考える時、時折り明星学園の常識は世間の非常識となり、世間の常識は明星学園の非常識となります。それはまだまだ日本の社会が「私たちのことを私たち抜きで決めないで」というスローガンを受け入れることができないでいるからではないかと思うのですが、皆さん、いかがでしょうか？